HOKUGA 北海学園学術情報リポジトリ
学校法人北海学園
北海学園大学
北海商科大学

| | |
|---|---|
| タイトル | イェイツの「イニスフリー湖上の島」 |
| 著者 | 川上，武志；KAWAKAMI，Takeshi |
| 引用 | 年報新人文学(13)：98-61 |
| 発行日 | 2016-12-25 |

Hokkai-Gakuen Organization of Knowledge Ubiquitous through Gaining Archives.

［論文］

# イェイツの「イニスフリー湖上の島」

川上　武志

## （序）

新進気鋭の作家イェイツの名を劇的に高めた「イニスフリーの湖上の島」（'The Lake Isle of Innisfree'）が『ナショナル・オブザーバー』（*National Observer*）に掲載されたのは一八九〇年十二月十三日のことである。『ナショナル・オブザーバー』は初め『スコッツ・オブザーバー』（*Scots Observer*）と称していた新興の週刊誌であったが、イェイツのこの抒情詩が取り上げられたときには、誌名の変更に伴って招かれたW・E・ヘンリー（William E. Henley, 1849-1903）が主幹を務めていた(1)。『エンサイクロペディア・ブリタニカ』（*Encyclopaedia Britannica*）の編集にも携わり、また週刊誌『ロンドン』（*London*）の主筆であった彼はおりしも、片足切断という自己体験にもとづく『病院にて』（*In Hospital*）をふくむ『韻文集』（*A Book of Verses*, 1888）で名声を博していた。ヘンリー自身は政治には興味がないと公言していたにもかか

わらず、この雑誌には編集者の信念である激しいユニオニズム[2]と帝国主義的な思潮があった。イェイツの青春と詩芸術の相互作用の成果ともいうべき「イニスフリーの湖上の島」の下書きを、我々は文学仲間であるキャサリン・タイナン(Katharine Tynan, 1861-1931)に宛てられた書簡のなかに見ることができる。本稿では先ずイェイツとヘンリーとの微妙な関係を、次にイェイツ家とロンドンとの係累を、さらに多くの人がイェイツ初期の傑作と考える「イニスフリーの湖上の島」を、それと同時期に書かれた自伝小説「ジョン・シャーマン」(*John Sherman*)や、後年に纏められた『自伝』(*Autobiographies*)や『回想録』(*Memoirs*)と重ねて眺めてみたい。

## 一　ヘンリーとの「絆」

イェイツ一家が、改めてロンドンのベッドフォード・パークに腰を落ち着けたのが一八八八年の三月末のことである。イェイツ家が住んでいたベッドフォード・パークからほど遠くないチズィックにヘンリーの家があって、そこで一、二週間に一度の割合でヘンリーを囲む若手の会が開かれていた。この若手グループのなかには後に『ナショナル・オブザーバー』のスタッフとなるものも少なくなかったが、イェイツもこの会合の一員に加わったのである。イェイツの『自伝』のなかの『四年間：一八九六―一八九一年』(*Four Years: 1896 -1891*)には、「多くの者たちと同様に私はヘンリーのもとで自分の教育を始めた」[3]とある。「ヘンリーの若者」[4]と呼ばれるメンバーには、帝国主義的作風で売出し中のキップリング(J.R. Kipling, 1865-1936)[5]がいたが、ときには年長のオスカー・ワイルド(Oscar Wilde, 1854-

1900)もその姿を見せることがあった。イェイツはヘンリーとは「ことごとく意見を異にした」[6]と述べているが、『四年間』には次のような件がある。

私は『ナショナル・オブザーバー』に、最初の良作である数編の叙情詩とそれほど悪くはない随筆を書いた。そしていつも自署したときは、その作品は自分なりにはある程度の出来ばえのものであったと思う。ヘンリーはしばしば私の抒情詩に修正を加えて、行や連に線を引いて、自分自身のものを書き足していた。それで当時最初の評判が沸騰していたキップリングにも、ヘンリーは書き直しをしているものと信じて、自分を慰めていた。最初は本当に、書き直されるのが恥ずかしかったが、他の人はそうではないのだと考えていた・・・[7]

しかしながら投稿した作品がこのような扱いを受けたとしても、自身の詩「妖精の国を夢見る男」(‘The Man who Dreamed of Fairyland’)が、『ナショナル・オブザーバー』(一八九一年二月七日)に掲載されたときに、ヘンリーがある手紙に「私のところの若者の一人が、なんと素晴らしいものを書いたということがお分かりですか」[8]と書き送ったことにイェイツは満更でもなかったのである。また、初期の詩をのぞいてヘンリーの詩が嫌いである、とイェイツは表白していたにもかかわらず、彼の醸し出す寛大さによってなんともいえぬほど賞賛していたとも述べている。ところがヘンリーは、アイルランドの自治などまったく認めようとはしないユニオニストであった。ここでヘンリーとは「ことごとく意見を異にした」などと言いながらも、彼の政治理念と相反する立場のイェイツが、なぜその会に加わっていたかと

いう疑問がよぎる。

イェイツが二十歳の頃に初めて顔を出した会合が、「トリニティ・カレッジの星」と呼ばれたC・H・オールダム(Charles H. Oldham, 1860-1926)が主宰する「コンテンポラリー・クラブ」(the Contemporary Club)[9]であった。この会合には総じてナショナリズムを標榜するメンバーが参加していた。イェイツがやはり賞賛していた人物に、ばりばりのナショナリストであったジョン・オリアリー(John O'Leary, 1830-1903)[10]がいる。亡命先から帰国後に、「アイルランド青年協会」(Young Ireland Society)の会長に就任したオリアリーに心酔したイェイツは、直ちにこの「協会」の一員となり、師とも仰ぐことになったオリアリーとの濃密な交流が始まる。一八九二年のイェイツを中心とする「アイルランド国民文芸協会」(Irish National Literary Society)の設立は、オリアリーの家で合意されている。十九世紀後半の「土地戦争」を指導したアイルランド自治党の巨魁、C・S・パーネル(Charles S. Parnell, 1846-91)亡き後に発足したこの「文芸協会」の目的も、アイルランド・ナショナリズムを文化的な面から高揚することにあった。政治的にはパーネル派のナショナリストであったイェイツが、ヘンリーの集まりに参加したのはイェイツ家の経済状態によるものかもしれない。というのもイェイツの父親が駆け出しの画家であったために、一家はこの父親からの稼ぎがほとんど期待できなかったのである。それまでの一家の収入源といえば、キルデア県トマスタウンにあった土地[11]から得られる地代だけが頼りだった。しかし十九世紀後半に勃発した三度に渡る「土地戦争」によって地代がますます下落したので、先祖から残されたこの土地は、何重にも抵当権が設定されたあげく売却されることになった。このことによって一家は五年ほどアイルランドに戻らざるをえなくなったが、画家としての己の技量を信じる父親とともに、

心機一転一家が再び上京したのが、先に述べた一八八八年年の初春ということになる。この頃のイェイツ家の財政は相当に深刻な状態にあった。イェイツの上の妹のスーザンも、詩人で社会運動家のW・モリス(William Morris,1834-96)の娘で、刺繍の名手であったメイ(Mary Morris)のところで働くことになった。またこの時期に運悪く母親が卒中の発作を起こすという事態が生じている。ほんの数年前に筆一本で身を立てると決意したイェイツではあったが、一八八八年二月十二日付のキャサリン・タイナンに宛てた手紙で、自分の就職問題について、「僕にとって定職につくということは一大事になるわけです。というのはそのことは昨今にないほどの心の安寧を意味するのでしょうが、パパはそれが僕にとってはすべてのことで害になると思っています・・・たぶん日常にあって心が自由でないということが、とてもよくないと思っているからでしょう」[12]と打ち明けている。このあたりの事情は、イェイツの生前未刊行であった「もう一つの自伝」ともいわれる『回想録』では、

> お金をまったく稼いでいないので、私はとても困っていた・・・隣人のヨーク・パウエル[13]が、ついに私をたしか『マンチェスター・クーリア』の編集助手に推薦しようと言ってきた。そのことに考えあぐんで数日間費やした。ただちに収入が得られることを意味していたのだが、それはユニオニスト系の刊行物であったからだ。ついに私は父に受け入れられないと話すと、父は「お前はわしの心からたいへんな重荷を取りのぞいてくれた」と言った。[14]

と述べられているが、ここにあるように父親が反対していること、就職先が出している出版物がユニオ

ニスト系のものであるという理由で、イェイツはこの話を断っているのである。これまでにイェイツが様々な刊行物に投稿していた詩や書評や記事はゆうに百本を超えていたが、出版社から支払われるわずかな稿料が彼の唯一の収入であった。総じてジャーナリスト嫌いのイェイツであっても、自分の記事や作品を取り上げてもらうために、おそらくジャーナリズム、ことに『ナショナル・オブザーバー』を編集するヘンリーとの縁故がどうしても必要だったのだと思われる。

イェイツには、「イニスフリーの湖上の島」と同時期に執筆された自伝的小説―いかにも自身を髣髴とさせる主人公が登場する『ジョン・シャーマンとドーヤ』がある。「ジョン・シャーマン」のほうについてイェイツは、一八九一年十一月二十日付けのAE[15]への手紙で、ヘンリーがこの小説をたいへん気に入っていると伝えている。またその数日後にオリアリーには、『ナショナル・オブザーバー』がもう一編の『ドーヤ』のような短いロマンスをイェイツが書けるかどうか打診してきたとも知らせている。『回想録』では、母やローシズ岬の水先案内人から取材した幽霊や妖精話などを投稿したと語っているが、一八九二年十一月を初回として、ヘンリーの『ナショナル・オブザーバー』に発表された数多くの物語は、イェイツの重要な物語集である『秘密の薔薇』(*The Secret Rose*, 1897)に収められることになる。また初期の詩集『薔薇』(*The Rose*)を構成する半分近くの詩は、『ナショナル・オブザーバー』に初出・掲載されたものであった。

## 二　少年イェイツのロンドン

イェイツの幼年期や少年期がいかなるものであったかを知りたいとき、先ず我々は彼の『自伝』の巻頭にある『幼年と少年時代の幻想』(*Reveries over Childhood and Youth*)を繙くことになる。ロンドンとイェイツ一家のそもそもの関与は、当初の予定では法曹界の門を叩くことになっていたイェイツの父親が、突然画家になると言いだして単身ロンドンに上京したことから始まる。イェイツが二歳の夏に家族が合流するのだが、四年ほど暮らしたロンドンの記憶はおぼろげで、住んだ家の窓から見た街並みを覚えているだけだという。その後イェイツ少年は二年間ほど、母親の実家であるスライゴーの祖父母の家に預けられる。強烈な祖父の思い出をイェイツは、「今日に至っても、『リア王』を読むと私にはいつも祖父の面影が浮かんでくる」[16]と述懐している。少年イェイツが再びロンドンに呼び戻されるのは九歳のときで、いったん一家はウェスト・ケンジントンのノース・エンドに落ち着く。『幼年と少年時代の幻想』ではこのところの記憶は多少曖昧である。最終的には十四歳のときに、田園都市計画で有名なノーマン・ショー(Norman Shaw, 1831-1921)[17]によって立案・建設された「玩具のような家が立ち並ぶ」ベッドフォード・パークに、イェイツ家は居を構えることになる。この転居の間に短期間ではあったが、イェイツは父親と二人だけで、ロンドン郊外のバーナム・ビーチズにあるアール家に滞在する。寄宿したのは父の画家仲間がたむろする家であったが、ここでの近所の農家の少年たちとの交流は、イェイツの数少ないロンドンでの最も楽しい思い出となっている。またそんな楽しい追憶の一つ、この地の森での散策のときに採取した生き物のことを、イェイツは『幼年と少年時代の幻想』のなかで、「森のなかには楽し

い冒険があった―あるとき、蛇トカゲと毒蛇が緑の窪地の中で戦っていた―また、時々アール夫人が部屋を片付けるのを怖がったのは、私が炉棚の上によくトカゲの入った壜を置いていたからである」(18)と語っている。この出来事は彼にとってよほど印象深かったようで、妹に宛てた稀少な少年時代の手紙では、

僕はガラス壜に二匹の水トカゲを飼っています。[壜に入っているトカゲの絵]・・・僕が捕まえたトカゲはサンショウウオと呼ばれているものです・・・僕のトカゲは夜に歩き回るのです。ある朝にアール夫人が戸棚の上の本を片付けにやって来たところ、本の上にトカゲがいたのです。それでトカゲがいなくなっても、恐ろしがって本を触ろうとはしませんでした・・・(19)

といったふうに綴られている。そこには郷里にも似た自然があったのである。

一方、イェイツ少年にとって最悪だったのは学校生活であった。十二歳からの約四年間イェイツは、ハマースミス地区にあるゴドルフィン校に通学することになる。初めての学校通いであったが、初めての授業の日にこれも初めての喧嘩を体験することになる。そしてアイルランド出身ということで、悪口を言われるたびに喧嘩となったのだが、体格が華奢でひ弱だったために一度も勝ったためしがなく、「悩み多い人生を送っていて、眼の周りに何度も痣をつくり、何度となく悲しみと怒りを爆発させていた」(20)。ところがそんな喧嘩に明け暮れた学校生活も、ついにある屈強で運動が得意な少年からボクシングを習い覚えてからは、少しはましになったようである。この学校時代にイェイツは、おもに夏季の休暇にな

ると、毎年のようにスライゴーの祖父母の家で過ごしたが、ロンドンに戻るたびに望郷の念に駆られたのも無理からぬことだろう。『幼年と少年時代の幻想』の次の一節

他日ホランド・パークの近くの飲料用噴水のところを通ったときに、一つの強烈な思い出が蘇えってきた。いうのはそこが妹と二人して、スライゴーへの憧憬とロンドンへの憎悪を話していたところだったからである。二人は涙も溢れんばかりだったと思う。そして今思い出しても驚くのは、そんな思い出の印などを気にかける人など誰一人として知らなかったからであるが、私は自分の知っているどこかの野原の一片の芝生、つまりこの手で握ったスライゴーの何かに思い焦がれたのである。それは未開人にある古い民族的な本能であった。[21]

は、「外国人」（＝英国系アイルランド人）と罵られ、学校仲間から孤立する当時のイェイツ少年の心境をよく表している。とくに「スライゴーへの憧憬とロンドンへの憎悪」という文言に「イニスフリーの湖上の島」の主題が窺える。

## 三　イェイツのイニスフリーの小島

イェイツ研究の泰斗W・M・マーフィーは、伝記研究家のジェイムズ・オルニーの伝記にたいする見解、「自伝というものがまったく信頼するに値しないのは、作家には自分の姿を自分自身が見られたい

ように描こうとする避けがたい誘惑があるからで、これはW・B・イェイツとっても逃れられないものである。小説家というものは、百の小さな虚偽を利用してより大きな真実に到達するが、自伝作家は百の小さな真実を利用して、より大きな虚偽に到達する」を紹介しながら、「ジョン・シャーマン」には、一八八〇年代後半のイェイツの人生についての感情の原点としては、彼の『自伝』よりもはるかに貴重なものがあるとし、他方『自伝』にはイェイツの散文によくある間接性や曖昧さがあると述べている(22)。この見解に従うならば、先ずは一八八七年から一八八八年にかけての二年間に執筆された「ジョン・シャーマン」に描かれている、イニスフリーの小島の箇所を見る必要があるだろう。

ある日曜日の朝に彼は―家から数百ヤードにある―テムズの河岸のほうへと歩いていって、柳で覆われたチズィック島を見ていると、終日夢うつつの状態に落ち入った。その島によって昔に見た白日夢を思い起こしたのである。森に取り囲まれた島を点在させるある湖が、故郷の庭を流れる川の水源となっていたが、子供時代に彼はよくそこにブラックベリーを採り出かけた。その湖の対岸の近くにイニスフリーと呼ばれる小島があった。たくさんの藪で覆われた岩ばかりのその中心部は、湖面から四十フィートほどあった。ときどき人生とその辛い仕打ちが、年長の少年の授業が誤って年少の子に課せられたように感じられたときに、彼は次のような夢が見られればいいなと思った。その小島にわたってそこに木造の小屋を建てて数年を使い果たすのであるが、小船を漕ぎ回して釣りをしたり、また昼は島の傾斜地で横になったり、夜は水のさざめきと藪―いつも見知らぬ生物で満ちている―の揺れる音に耳を傾けたり、朝は島の水打ちぎわに残された鳥の足跡を見にいったりするのである。(23)

この小説が書かれたのがイェイツ弱冠二十二、三歳の頃である。次に文章の性格が違うとはいえ、すでに四半世紀ほど隔たって齢五十に達しようとしているときのイェイツが、『幼年と少年時代の幻想』に語っているイニスフリー島の箇所を見てみよう。

父が『ウォールデン』の中のある文章を読んでくれたことがあって、それで私はいつの日かイニスフリーと呼ばれる小島に、小屋を建てて暮らすつもりでいたのである。そしてそのイニスフリーは、私が寝ようとしていたスリッシュの森の真向かいに浮かんでいた。

女性と恋愛にたいする肉体的な欲望と自らの精神的な性癖を克服して、ソローのように知恵を求めて生きるのだと私は考えた。この地方に伝えられている一本の樹についての逸話があった。イニスフリーにかつて生えていたもので、ある恐ろしい怪物に守られていて、神々の食べ物をその実につけるという樹なのである。ある若い娘がその実を所望して、自分の恋人に怪物を殺して実を持って来るようにと言いつけた。彼は言われたとおりに実行したのだが、その実の味見をしてしまうのである。それで彼が娘の待つ本土に着いたときは、その実の強力な効き目によって瀕死の姿となっていた。そして悲しみと悔恨から、娘のほうもまたその実を食べて死んでしまうのである。私がその島を選んだのは、島の美しさかこの話のせいであったかは思い出せないが、二十二、三歳になるまでその夢を諦めることはなかった。(24)

これは少年イェイツが学校の休暇中にスライゴーに帰ったときに（このときは母方の伯父であるジョージ・ポルクスフェンの家に滞在していた）、イニスフリーの島が浮かぶギル湖を囲む森のなかを逍遥したときの回想である。この文章からは、後年になってからのいくぶん理想化（脚色）された思い出が語られている気配が感じられるが、いずれにせよ彼にとってイニスフリーの小島で暮らすことが、少年時代から育んだ夢だったのであり、青年になってもなおも諦めきれぬ幻想だったのである。

先にも触れたが、イェイツ家がその家計の逼迫のために、ロンドンを離れてダブリン近郊のホウスに転居したのは一八八一年の秋イェイツ十六歳のときであった。ちょうどこの時期にロンドンでボクシングを教わった例の運動の得意な少年が、夏の休暇を過ごすためにイェイツ家を訪れたことがある。イェイツ唯一の学校仲間というべき少年と、ダブリンの北東にあるランベイ島を訪れたときに、イェイツはこの少年に「僕はいつもこんなところで暮らせればいいな。きっと何時かそうするよ」[25]と告白していたことがあった。

人口に膾炙されることは悪いことではないとしても、後年にそのために食傷気味にさせられる「イニスフリーの湖上の島」は、

The Lake Isle of Innisfree

I will arise and go now, and go to Innisfree,
And a small cabin built there, of clay and wattles made:
Nine bean-rows will I have there, a hive for the honey-bee,
And live alone in the bee-loud glade,

And I shall have some peace there, for peace comes dropping slow,
Dropping from the veils of the morning to where the cricket sings;
There midnight's all a glimmer, and noon a purple glow,
And evening full of the linnet's wings.

I will arise and go now, for always night and day
I hear lake water lapping with low sounds by the shore;
While I stand on the roadway, or on the pavements grey,
I hear in the deep heart's core. [26]

イニスフリーの湖上の島

さあいざ行こう、イニスフリーの湖上の島へと、
そしてそこで土と編み枝の小さな小屋を建て、
そこで九本の苗床に豆を植え、蜜蜂の巣箱をすえよう、
そして蜂かしましい森の空き地にただ一人暮らそう。

そこには安らぎがあるだろう、安らぎはそっと滴(したた)るもの、
朝の帳(とばり)からコウロギの鳴くところに滴るものだから。
そこには真夜中には微(かす)かな光が、真昼には華やかな輝きがあり、
日暮れにはベニヒワの羽音がいっせいになり響く。

さあいざ行こう、夜となく昼となく、たえずこの耳には
岸辺にひたひたと寄せるひそかな水音が、聞こえるから、
車道や灰色の舗道にたたずむときに、
この深い心の奥底に聞こえてくるのだから。

といった作品である。ここで冒頭に述べた一八八八年十二月二十一日付のキャサリン・タイナンに宛て

た手紙のことになる。一般に書簡というものには現在進行形で出来事が語られるという強みがある。タイナン宛のこの手紙で、イェイツは二編の詩を書いたと述べ、その一編がスライゴーにあるギル湖のイニスフリーという美しい島についてのものであるとし、「昔からの伝説がある小さな岩の島です。私の物語のなかで、登場人物の一人が困ったときに、いつものその島に出かけていって、そこに一人で住むことを希うようにしたのです―私自身の昔からの夢なのです。彼の心情を考えて、こんな詩を書いてみました」[27] と説明している。ここで「私の物語」といっているのは、もちろん「ジョン・シャーマン」のことで、またそのなかの「登場人物の一人」というのも、イェイツ自身がそのモデルとされる主人公ジョン・シャーマンのことである。さらに「昔からの伝説」というのが、先の引用にあるスライゴー地方に伝わる、イニスフリーに生えていたという木のことで、W・G・ウッド-マーティンの『スライゴー県と町の歴史』(*History of Sligo, County and Town*) から取材された逸話となっている。ところでタイナンへの手紙あった「イニスフリーの湖上の島」の下書きは、次のようなものであった。

I will arise and go now and go to the island of Innisfree
And live in a dwelling of wattles — woven wattles and wood work made,
Nine been rows will I have there, yellow hive for the honey bee,
And this old care shall fade.

There from dawn above me peace will come down dropping slow

Dropping from the veils of the morning to where the household cricket sings.
And noontide there be all a glimmer, midnight be a purple glow,
And evening full of the linnet's wings.[28]

さあいざ行こう、イニスフリーの島へ行こう、
そして小枝の住居に暮らそう―小枝と木でできた。
そこで九本の苗床に豆を植え、蜜蜂の黄色い巣箱をすえよう、
すると昔からのこの労苦もきっと消えうせるだろう。

そこには夜明けとともに、安らぎが私の上にそっと滴るだろう。
朝の帳から家コウロギの鳴くところに滴るだろう。
そしてそこには真昼にはたえず微かな光が、夜中には華やかな輝きがあり、
そして日暮れにはベニヒワの羽音がいっせいになり響くだろう。

この下書きの冒頭は、コメンタリーなどで指摘される『ルカ伝』の放蕩息子の帰還のところとの類似を別とすれば、タイナンの詩集『バラッドと叙情詩集』(*Ballads and Lyrics*)の「イニシュカ」('Inishkea')の書き出しの部分、「立ち上がって私はイニシュカへ行こう／多くのものが私と涙するところへ・・・」('I'll rise and go to Inishkea, / Where many a one will weep with me・・・')に触発されている[29]という。

しかし最終稿に仕上がるまでには、ヘンリーの筆がどのくらい加わったのかは知るよしもないのだが、この下書きには後に相当の修正が加えられたことが容易に推測できる。さらに最終稿にある第三連目が見当たらないということが問題となる。第三連目が欠落していることで、この下書きには、語り手のロンドン対スライゴーという「場」の相克が見られず、また逃避的主調が際立つのみで、決定稿にあるような劇的な主題がぼやけてしまっている。

後年になってイェイツの上の妹が、「イニスフリーの湖上」の創作過程のことで親類に書き送った手紙がある。それによると、この詩ができたときに、イェイツ当人も非常に熱心に読み上げたので、湖に打ち寄せる細波が聞こえてくるぐらいに、妹自身もスライゴーの美しさに感じ入っていた。だが、たまたまそのときに来訪していた妹の刺繍の仕事仲間であるヘレン・アコスタという女性が、絵筆を回してくれないかと言ったそうである。つまりこの客はイェイツが情熱的に読んだ詩をまったく聞いていなかったのであり、聞くふりさえもしなかったというのである。妹の曰く「我々の誰もがそれがどれほど偉大な瞬間であった気づかなかった」(30)のである。

「イニスフリーの湖上の島」の創作動機については、先ずこの作品の創作から三十数年たって『自伝』に合本されることになる『四年間』には、

私には十代のときにスライゴーで育んだ願い、つまりソローの真似をしてギル湖にある小島イニスフリーで暮らすという願いをいぜんとして抱いていた。そしてホームシックになってフリート街を歩いているときに、ピチャピチャというかすかな水音が聞こえてきたので、見ると店のショーウインドー

のなかに噴水があって、その噴出しで小さな玉がバランスを取っていたのである。そこで、私は湖の水面を思い出すことになった。私の詩「イニスフリー」はそういった突然の追憶から出てきたが、私自身の音楽のリズムになんらかの含みのもつ最初の抒情詩であった。[31]。

との記述が見られる。次に、この『四年間』の数年前に書かれた『回想録』にも、「ジョン・シャーマン」の執筆中に、作品のなかにスライゴーの記憶と愛着を込めはじめたが、そんなときにストランド街を歩いていて、とある店のショーウインドーを覗いてみると、水の噴出孔で踊っている小さな玉があった。それでスライゴーの湖の細波を思い出して、突然の情緒に揺り動かされて「イニスフリーの湖上の島」という詩が生まれたのだと述べている[32]。ところが「イニスフリーの湖上の島」と創作が同時期の「ジョン・シャーマン」では、

ストランド街の人込みで遅れたときに彼が耳にしたのは、すぐ近くでかすかに滴っている水音であった。その音はあるショーウインドーから聞こえてきたのだが、そこにあった勢いよく吹きだす小さな噴水が、その先端にある木製の玉を落ちないようにバランスを取っていた。その音によって彼の脳裏に浮かんだのは、長いゲール語の名がついた滝のこと、バラの「風の門」[33]へとどっと流れ込む滝のことであった。[34]　（傍線筆者）

となっている。主人公が連想したのはイニスフリーの湖面ではなく、グレンカー湖に流れ落ちる「滝」

のことになっているのである。事実この「滝」は下からの強風によって、本来なら落下するはずの水が、噴水のように吹き上げる状態になることがある。だからショーウインドーの水の噴出から、シャーマンの脳裏に浮かんだのは、「長いゲール語の名がついた滝」であるほうが話が合うように思われる。小説ではその後で、先に引用したシャーマンがとある日曜日にテムズ川を散策したときに、その中州にあるチズィック島を見て、子供時代によく訪れた森の対岸に浮かぶイニスフリーの小島のことを思い出すという展開になっている。イェイツが、ロンドンの雑踏（フリート街かストランド街かはここでは詮索しないものとして）のなかで聞こえたというショーウインドーの噴水から、イニスフリーの小島に寄せる細波のことを思い出したというのは、おそらく彼の記憶違いか、あえていうならば劇化（dramatization）であるかもしれない。心理学に「記憶はときに嘘をつく」という言葉があって、人間の脳は、記憶を修正したり消去したりするといわれる。また修正する場合にも、自分に都合よく変更して蓄えるともいわれている。ここで我々は、今一度ジェイムズ・オルニーの見解を思い出す必要があるのかもしれない。

## （結び）

「ジョン・シャーマン」のなかでイェイツは、自身の「自我」ともいえる主人公に、「ロンドンがこれほどまでに、おき去りにされた砂礁のようなところだと、自分に思われることはなかった」[35]といった心情を吐露させている。またタイナンに宛てた一八八八年二月の長い手紙では、やはり長い便りを彼女に催促しながら、「僕はこのおぞましいロンドンで、ロビンソン・クルーソーのように感じています」[36]

と打ち明けている。さらに同年の十一月オリアリー宛のものにも「私の物語［ジョン・シャーマン］を始めなければなりませんが―その作品のモチーフはロンドンへの嫌悪です」[37] とも述べている。上京してきたばかりの青年イェイツが、ロンドンの喧騒に一人たたずんだときに、ふと郷里スライゴーの自然がその脳裏を掠めたのも、宣なるかなとも思われる。しかしロンドンにあっては、スライゴーにいたときに幼児期の育ての母のように感じた町並みの光景が、いざ帰省してみると、「ここは僕にとって世界で一番さびしいところです。散歩するとたえず亡霊に出会うのですが、スライゴーは僕には血肉をもって引きつけるものがありません―」[38] と実感させられる場所でもあった。このことはイェイツ自身の「反対我」、つまり「ジョン・シャーマン」に登場するもう一人の人物であるハワードに、スライゴー（小説ではバラ）のことを「ここの生活は十八世紀の暮らしだよ―あのむさくるしい世紀のね・・・やれやれ、僕はこんな灰色の通りや灰色の人間たちにはうんざりだ」[39] と言わせていることからも伺える。そうなると「イニスフリーの湖上の島」は、アイルランドの田舎町から大都会に足を踏み入れた青年のたんなる望郷の詩ばかりでもないということになろう。

（かわかみ　たけし・北海学園大学人文学部教授）

［註］

（1）一八八九年に『ナショナル・オブザーバー』と改称されたこの雑誌は、最初『スコッツ・オブザーバー』という名前によって、一スコットランド出身のヘンリーの友人によって一八八八年に発刊された雑誌である。ヘンリーがこの雑誌の編集に携わったのは一八八八年の十二月から一八九四年の二月までである。

（2）アイルランドは一八〇一年の「併合法」によって連合王国の一部となったが、イギリスとの併合を維持する立場（ユニオニズム）を主張する者をユニオニスト、それに反対する者をナショナリストという。ただしナショリストの立場にも、「自治」（「ホーム・ルール」）を求める穏健派と、分離・独立を求める過激派があった。

（3）W・B・イェイツ『自伝』（*Autobiographies*, Macmillan, 1961）一二四頁。

（4）キップリングのほかには、チャールズ・ウィブリー、『黄金時代』（*The Golden Age*）の著者であり童話作家のケネス・グレアム、小説家バリー・ペイン、美術評論家R・A・M・スティーブンソン、政府閣僚とアイルランド主席秘書官を務めることになるジョージ・ウィンダムなど（イェイツ『自伝』一二八頁）。

（5）一八八九年にインドから帰国したキップリングは、『高原平話』（*Plain Tales from the Hills*, 1888）などの短編小説ですでに人気を博していた。

（6）『自伝』一二四頁。

（7）『自伝』一二九頁。

（8）『自伝』一二九頁。

（9）「コンテンポラリー・クラブ」は一八八五年にオールダムによって創設されたクラブで、会員はそこで当代の社会、政治、文学の問題を話し合った。

（10）オリアリーは、一八六五年の反英騒乱のために逮捕され、五年間の獄中生活の後に十五年にわたる国外退去を命ぜられ、パリに長く暮らすのであるが、一八八五年に帰国が叶って「アイルランド青年協会」（Young Ireland Society）の会長に就任する。

（11）イェイツ家はキルデア県トマスタウンに六二六エーカーの土地を所有していた。この土地は、イェイツ当人から数えて四代遡るベンジャミン・イェイツと結婚したメアリー・バトラーが、その実家から相続したものであった。

(12) ジョン・ケリー編『W・B・イェイツ書簡集、第一巻、一八六五年〜一八九五年』(*The Collected Letters of W. B. Yeats, Vol. 1, 1864~1895*, Oxford, 1986) 四八頁。
(13) ヨーク・パウエル (York F・Powell, 1850-1904)、オックスフォードの勅任歴史学教授であり、イェイツ一家が住まいするベッドフォード・パークに家があった。
(14) イェイツ『回想録』(*Memoirs*, Macmillan, 1972) 三二頁。
(15) 本名ジョージ・ラッセル (George Russell, 一八六七〜一九三五)、アイルランドの詩人・批評家。イェイツとは美術学校時代から付合いがあり、生涯にわたる友人であった。
(16)『自伝』九頁。
(17) ノーマン・ショーは英国の十九世紀後半における最も重要な住宅建築家の一人であるが、一八七九年〜八二年に「ベッドフォード田園都市計画」を立案・制作している。
(18)『自伝』二十八頁。
(19) ジョン・ケリー編『W・B・イェイツ書簡集』三頁。
(20)『自伝』三五〜三六頁。
(21)『自伝』三二頁。
(22) W・M・マーフィー『家族の秘密　ウィリアム・バトラー・イェイツと親類』(*Family Secrets, William Butler Yeats and Relative*, Syracuse U. P., 2005) 四〇四頁。
(23) W・B・イェイツ『ジョン・シャーマンとドーヤ』リチャード・J・フィネラン編 (*John Sherman and Dhoya*, Macmillan, 1991) 五七頁。
(24)『自伝』七一〜七二頁。
(25)『自伝』五九頁。
(26) リチャード・フィネラン編『W・B・イェイツ詩集、新版』(*W. B. Yeats, the Poems*, Macmillan, London,1983) 三九頁。
(27)『W・B・イェイツ書簡集』一二〇〜二二頁。
(28)『W・B・イェイツ書簡集』一二二頁。

(29)『W・B・イェイツ書簡集』一二一頁。
(30) R・F・フォスター『W・B・イェイツ：人生 I：新参の魔術師 一八六五年―一九一四年』(*W. B. Yeats: A Life I: The Apprentice Mage 1865—1914*, Oxford U. P., 1998) 七九頁。
(31)『自伝』一五三～五四頁。
(32)『回想録』三一頁。
(33) ここにある「風の門」については、R・J・フィネラン編の『ジョン・シャーマンとドーヤ』の後注で詳しく説明されているのでそれを引用する。

スライゴー近郊にあるブルベン山の斜面からグレンカー湖に流れ落ちる滝の一つ。W・G・ウッド-マーティンが『スライゴー県と町の歴史』(ホッジス、フィッギス、ダブリン、一八八二～九二年) で記述しているように、「それらの一本はアイルランド語で *Sruth-an-ail-an-aard* すなわち高度に逆らう流れと呼ばれているが、その奇妙で見かけによらぬ景色から、それが表わしているのは通常の陸水学の法則にたいして正反対のことになる。風がある特定の地点から吹くときに、水が山にたいして上方か逆の方向か上方に噴き上げられるか、あるいは軍旗のように一面に広がる水しぶきとなってその地点から外側に向かって噴出される」(第一巻、八八～八六頁)。

私の知る限りでも、スライゴー地域に関連する地名で「風の門」と翻訳される場所はない。しかしながらスライゴー郡のキャナロウ教会の向かいの丘には、英語で「風の裂け目」として知られ、Bearna na Gaoithe (「風の裂け目」) と呼ばれる割れ目がある。これは「天国に駆けだす」('Running to Paradise') の最初の詩行に関連するかもしれない。(『詩集』改訂版、リチャード・J・フィネラン編［マクミラン社、ニューヨーク、一九八九年］一一五頁)。
(34)『ジョン・シャーマンとドーヤ』五六～七頁。
(35)『ジョン・シャーマンとドーヤ』四一頁。
(36)『W・B・イェイツ書簡集』五〇頁。
(37)『W・B・イェイツ書簡集』一一〇頁。
(38)『W・B・イェイツ書簡集』四一頁。
(39)『ジョン・シャーマンとドーヤ』八頁。